

公助の限界のイロイロ

30年以内に80%の確率で発生すると言われている南海トラフ地震。公的機関は一人の犠牲者も出さないために様々な取り組みを進めていますが、そこには限界があること、皆さん知っていましたか？



想定死者数
650人



想定負傷者数
1,700人

最大クラスの南海トラフ地震が発生した場合（平成25年5月高知県公表）

限界
その1

救助できる人の限界 — いつあなたの元に救助の手が届くのか分かりません —



×41人

四万十清流消防署員



×345人

消防団員



×42台

消防車両

救助員が全員救助に回れるとは限りません。さらに火災や建物倒壊、道路の寸断があると救助に時間を要し、救助の手が来ないことも十分考えられます。

限界
その2

役場にある備蓄の限界 — 外部からの支援もすぐに届くとは限りません —



×想定避難者数×3.5日分

※沿岸部は1週間分
※外部の救援物資は発災後、4日目以降の到着を想定

限界
その3

二次避難所に配置できる町職員の限界 — 地域の命は地域でつなぐ —



発災時、町職員は人命救助や行方不明者の捜索が最優先となるため、避難所に駆けつけることができないことが想定されます。そのため、地域住民による避難所運営が必須です。

限界がある公助。一人の犠牲者も出さないためには、公助だけではなく、自助・共助の力が絶対です。

四万十ケーブルテレビ

×防災

見
つける

容易に近づくことができない災害現場にはドローンを使用し、的確な状況の把握につとめます。

伝
える

災害時、被害状況やライフラインの復旧状況といった生活情報が一番必要とため、災害放送室にて緊急事態を生放送します。

強化
する

大規模災害時、四万十ケーブルテレビ1局だけの情報源ではなく、さらに充実した情報が提供できるよう、各放送局などのメディア同士と協定を結び協力体制の構築を図っています。

特集



公助編

しまんと防災



四万十清流消防署員のみなさん

シリーズ
3/3

一人の犠牲者も出さないために

自助、共助に続いて特集の最後は、公助。近年、頻発する災害の被災地からは「まさか、自分が」という声を耳にします。そんな誰もが被災してしまう今日、一人の犠牲者も出さないために、公的機関では避難場所などの整備や、備蓄など様々な備えを行っています。

しかし、その備えにも限界があります。

災害現場の最前線に立つ消防署員

発災直後10分以内に行う、消火・救助・救護がその後の被害の行方を大きく左右します。そのため、少しでも被害を少なくするためには、住民のみなさんの協力が欠かせません。みなさんが、素早く判断し的確な行動がとれるよう、消防が持つノウハウを少しでも伝えられればと思います。

我々署員は、発災時、消火活動、救助といった長期にわたる活動が予想されます。そのためにも知識、技術、体力を培う訓練を行っています。そんな我々でも必ず生き残れるかは誰にも分かりません。万が一のことがあれば、圧倒的に救助の手が不足するのです。

しかし、一人ひとりの備えができていれば、限られた救助員の中で本当に救助が必要なところへ助けに向かうことができます。基本的な備えである家具の固定やガラスの飛散防止などの自助は絶対に取り組んでください。

一人の犠牲者も出さないためには、助かるひと、救助できるひとを増やすことが災害対応の第一歩だと考えています。

この人に直撃
インタビュー！



四万十清流消防署
笹岡署長